りんご情報 No.13

令和６年　９月１０日発行
ＪＡグリーン長野営農販売部・経済部
ＪＡグリーン長野りんご部会

◆当面する重点作業

１．中生種の着色管理と適期収穫に進める。
２．高温乾燥が続く場合は、定期的にかん水を行う。降雨が多く滞水する場合は排水を行う。
３．高温により、日焼け果が多いので葉摘みに注意する。
４．梅雨時期の降雨により、炭そ病・輪紋病の発生が心配される。発生が見られた場合は、見つけ次第埋める。梅雨時に感染した被害果を除去し２次感染を減らす。
５．シンクイムシの発生が多い場合は防除間隔が開け過ぎないように散布を行う。
６．高温が続くため、ハダニの発生に注意する。

◆特別薬剤散布について《今年は、実施しましょう》

本来は、特別散布だが、本年は実施したい。
１．散布時期：９月１７日(火)～９月２２日(日)　散布日　　月　　日
２．調 合 量：水１００ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前/使用回数
展　　着　　剤	１０mℓ	―	―
(アーデントフロアブル)	５０mℓ	シンクイムシ類	前日
ストライド顆粒水和剤	６６ｇ	すす斑病・すす点病・斑点落葉病・黒星病	前日

３．散 布 量：１０ａ当り⇒５００ℓ 以上
４．散布上の留意事項

①シンクイムシ類の発生が心配される場合は、アーデントフロアブルを加用散布する。なお、アーデントフロアブルに代えて、イカズチWDG1,500 倍（水 100ℓ当り 66mℓ・収穫前日まで）を使用してもよい。

②ストライド顆粒水和剤は高温時に使用すると薬害が発生する場合があるので、涼しい日を選んで（当日だけでなく翌日も）使用する。

③果面の汚れ軽減のため、通常展着剤に代えて特殊展着剤ササラ 3,000 倍（水 100ℓ 当り 33mℓ）を使用しても良い。

④収穫中・収穫間近な品種は農薬の汚れが付くので散布しない。

⑤ダニ剤として年間何回でも使用可能なアカリタッチ乳剤 1,000 倍（水 100ℓに 100mℓ・収穫前日まで）を単剤で特別散布しても良い。
散布から１週間ほどで再び成虫が発生し始めるため、発生状況を確認しながら繰り返し使用するとより効果的。物理的作用による効果の為、抵抗性は発達しない。卵には効果がない
高温時の散布は控える。展着剤は使用しない。単剤での散布を基本として使用する（薬害防止）

◆秋映・シナノスイートの着色管理について

１．葉つみの時期が早いと日焼けをおこすので、９月上中旬頃から実施する。
西日のあたるところは日焼けになりやすいので、特に注意して行うる
行う場合は軽く(密着している葉のみ)実施する程度とする。
着色に影響しない果実周りの立っている葉を残し、糖度向上と日焼け防止を図る。
２．日焼け防止の為に葉摘みや支柱立ては果実温が十分に上がった午後から実施する。
また、徒長枝の切りすぎや葉の摘みすぎに注意する。極端に強い葉つみは日焼けの発生や着色を不鮮明にし、さらに来年の花芽形成も悪くするので注意する。
※葉摘みの程度：弱く：２～３枚、普通：５～６枚、強く：１０枚以上

◆９月肥（礼肥）の施用について

葉を若返らせて光合成を盛んにし、花芽の充実・貯蔵養分の蓄積を図り、翌春の初期生育(開花・結実)を助ける。ただし、秋伸びを避けるため、若木・強勢樹は施用しない。

１．施用時期：①早生種　つがる＝９月中旬
　　②中生種　秋映・シナノスイート＝収穫終了後

２．施 用 量：一般的な成木の場合　　・有機専科　１袋を施用する。
　　（１０ａ当り⇒主体となるチッソ成分量で１～２kgを目安にする）

３．留意事項

①有機専科以外を使用する場合は含有成分量を計算し、適正量を施用する。
ただし、カリ過剰になっている園はカリの入っている肥料（醗酵ケイフン等）の施肥を控える。
また分解の遅い肥料は時期を早めて施肥する。

②樹勢が強い場合は、９月にスミクリン５袋を施用する。軽いため風の無い日を選んで施肥する。

◆高密植（新わい化）栽培の９月肥（礼肥）の施用について

９月～１０月に施用した養分は、根部に蓄積され３～４月の初期生育に使用されると共に、凍害軽減にもなり、高密植・新わい化栽培において秋の肥培管理は特に重要となる。
主幹先端の伸長が３０ｃｍ程度になるよう調整する。

１．施用時期
　①早生種：シナノリップ・つがる＝９月中旬
　②中生種：秋映・シナノスイート・シナノゴールド＝収穫終了後
　③晩生種：ふじ等収穫の遅い品種は、３月頃になってから行う。

２．施 用 量
　①定植２年目：「グリーン長野果樹専用有機入り 72」１袋と「果樹の力」１袋
　②成木　　：有機専科２袋　（樹勢が弱い場合は３袋）
　　収量が多くなるに従い樹勢に応じて調整する。施肥は株元中心に行う。

３．樹勢の判断　主枝延長枝の適正伸長
　①定植１年目　　：３０～５０ｃｍ（100ｃｍ伸びても良い）
　②定植２年目　　：５０～１００ｃｍ（150ｃｍ伸びても良い）
　③定植３年目以降：３０～７０ｃｍ

４．その他肥料

高密植・新わい化栽培では生産量が多いことから、カリウム（加里）を多く消費するので、「有機専科」に代えて「醗酵けいふん（ペレット状）」３～４袋でもよい。
「ペレット状」と「粒状」では、成分が異なるので注意する。また土壌ＰＨが高い場合は使用しない。
なお、土性診断を行うとカリウム過剰になっている園が多いので、今の所欠乏問題は無いが、今後は施肥も必要になる。
「醗酵けいふん」は、窒素肥料も含まれるが、加里や石灰も多く含まれるため、過剰の園では控える。

◆カルシウム欠乏対策について

ビターピット・ジョナサンスポット、コルクスポット等カルシウム欠乏対策として、必要に応じて、下記内容により、葉面散布肥料を散布する。

１．対策時期：継続して月に１回程度

２．使用資材：

資材名	倍率	１００ℓ当り使用量
ストピットⅡ	５００倍	２００ｇ
スイカル	１，０００倍	１００ｇ
カルビタ	１，０００倍	１００ｇ
カルタス	５００～１，０００倍	２００～１００ｇ

３．注意事項：基本、カルシウム肥料とリン酸肥料は結合してしまうため混用しない。カルタス又はカルビタは混用可能。
又は、そもそも混合されている、カルビタＰを使用してもよい。
ストピットⅡは、白くなるので収穫前の使用は控える。

◆葉面散布剤の使用について

いずれも定期防除に混用して散布しても良い。日中の高温時には散布しない。

１．ふじの着色向上対策

ふじの地色の抜けを良くし、着色向上・糖度の向上を図ることを目的に、次のいずれかのリン酸肥料を２～３回散布する。なお、強樹勢やハダニ類の被害にあった樹は、必ずしたい。

１）使用肥料・倍率の例

商品名	使用倍率	内容
メリット赤	300～500 倍(水 100ℓ 当り 330～200ｇ)	Ｐ10－K9－微量要素
色一番Ｅ	1,000～2,000 倍(水 100ℓ 当り 100～50ｇ)	Ｐ42－K28－微量要素
カルビタＰ	770 倍(水 100ℓ 当り 130ｇ)	N2.2-P14.5-K1.9Mg1.1 -Mn0.27-B0.31 カルシウム補給にもなる。

２）使用時期：１回目９月中旬・２回目９月下旬・３回目１０月上旬

３）留意事項

①樹勢が落ち着いている樹で使用する場合は、第１回目の散布をメリット赤に代えて、メリット黄 500 倍(水 100ℓ 当り 200ｇ)を使用すると良い。

２．留意事項

１）リン酸肥料とカルシウム肥料と基本混用しないが、カルタス又はカルビタは混用可能。
又は、そもそも混合されている、カルビタＰを使用する。

２）薬剤散布に混用してもよい。この場合展着剤は、不要です。

３．ハダニの被害にあった樹の対策

ハダニにより葉の色が赤くなってしまった場合は、葉の光合成能力が低下し果実の熟期が遅れや、着色、糖度が上がらない。

このため、地色の抜け・着色・糖度の向上を目的に、次のいずれかの葉面散布肥料を散布する。

１）使用肥料・倍率の例

商品名	使用倍率
オルガミン	1,000-2,000 倍(水 100ℓ 当り 100-50 mℓ)
ケルパック６６	500-1,000 倍(水 100ℓ 当り 200-100 mℓ)
友果	500-1,000 倍(水 100ℓ 当り 200-100ｇ)

２）使用時期：薬剤散布の度に混用するとよい。単用散布でも可。